

風土記の考古学

—古代人の自然観

辰巳和弘（天学歴史資料館学芸員）著



白水社
2,400円

私は、かねがね著者の研究に触れて、思っていたことがある。それは、著者の研究が、考古学とか古代史とか、民俗学という既成の研究の枠を越えているということである。いうなれば、総合化された古代学なのである。

たとえば、本書で教えられるのは、遺蹟や遺物の評価を、古代の環境の中で理解しようとする姿勢である。読者は、読み進むうちに、「なるほど古代の聖地とはこんな場所だったのか」と、思わず感嘆の声を上げてしまうのである。そこに、辰巳古代学の本領があるのではない。私は、今回その意を強くし

た。

次に思うのは、記述が平易であるということである。こういつてはなんだが、フツウの考古学者の文章は難しい。これは、事実を客観的に伝える考古学者の癖によるものだろう。しかし、著者は違う。難解なことを、専門外の人間にもやさしく伝えてくれる。現に、万葉学徒である私にもよくわかった。

古代人の環境に対する考え方を知る最適の入門書に巡り合えた『喜び』をどう読者に伝えたらよいか。ひよっとすると、この紹介文は、私の学力テストになったかもしれない。

上野 誠（奈良大学国文学科助教授）

源氏物語の風景

王朝時代の都の暮らし

瀧谷 寿（女子大学文学部教授）著



吉川弘文館
1,700円

親しみやすい、瀬戸内寂聴氏の現代語訳が刊行された頃からであろうか、今また『源氏物語』が広く読書人の関心と呼んでおり、関係の書物が書店の新刊棚をにぎわしているほか、同氏が名誉館長を務める宇治市の源氏物語ミュージアムも開館以来大変な賑わいと聞いている。

こんななかで、このたび刊行された本書は、その副題「王朝時代の都の暮らし」が象徴しているように、『源氏物語』を生み出した時代、すなわち摂関時代の平安京を舞台に繰り広げられた貴族や庶民たちの生活や思いに焦点をあてて、平易に叙述したものである。

その具体的な方法として、当時の文芸作品や貴族の日記はもとより、平安京内外の発掘調査や史跡の現地踏査の成果も広く取り入れ、さらには絵巻物などの視覚資料にも及びながら、著者一流の華麗な文体で当時の「風景」が再現されている。

類書の少なくない中であつて、とりわけ本書の画期的な点は、春・夏・秋・冬の四季の移り変わりに即した構成をとっていることで、「夏の章」では例えば賀茂祭（葵祭）や祇園御霊会（祇園祭）が、また「冬の章」では雪をめぐる王朝貴族の哀歓が語られる、といった具合である。なおこれには、『源氏物語』に登場する光源氏の邸宅「六条院」の結構にヒントを得られたとは著者みずからが述べられているところである。これに先立って著者が監修された『源氏物語五十四帖を歩く』（JTB）とともに大方にお勧めしたい。

竹居明男（天学文学部教授）



藤原書店
2,800円

言語都市・上海 1840-1945

真銅正宏 (天文学部助教授) ほか著

かつて、「魔都」と称された上海は、その特異な近代性ゆえに中国では正當に評価されず、「囲われ」「隠され」てきた。だが80年代以後状況は一変し、文学、美術、映画、テレビなど各分野で「上海現象」といわれる状況が現出している。日本においても、『上海史—巨大都市の形成と人々の歩み』(東方書店'95年)、『上海—魔都100年の興亡』(新潮社'96年)、『上海人物誌』(東方書店'97年)、『図説上海—モダン都市の150年』(大修館書店'98年)と意欲的な研究が次々に公刊されており、本書の出版もこうした流れに位置づけられよう。本書は①近代上海の歴史的概説、②

上海を舞台にした作品分析、③日本人の上海体験、④上海事典の四部分から構成され、学生や社会人の「上海学入門書」としての性格を持つているが、類書との決定的な違いは、上海そのものではなくて、日本文学の「近代」の意味を、「上海」を通して暴きだそうとする点にある。第二章「テクストの言語都市」で展開される、村松梢風から堀田善衛にいたる十人の作品の分析から、これまで「日本・日本語・日本人」と四位一体のものとして確定されてきた日本近代文学が「ゆらぎ」(小森陽一)始めているのを目にすることができよう。そしてこの延長線上には、旧満州・朝鮮・台湾など「周縁」の問い直し作業が存在する。本書は日本文学研究者の本格的作業が「端緒」に着いたことを示すが、その「端緒」の意味は決して小さくはない。

阪口直樹

(大学言語文化教育研究センター教授)



明石書店
2,000円

現代イギリスの基礎知識—英国は変わった

小野 修 (大学名誉教授) 編著

Robert Cross

(大学言語文化教育研究センター助教授)

田口哲也・押本年眞

(大学言語文化教育研究センター教授)

斉藤延喜 (天文学部助教授) ほか執筆

学生時代、イギリスの正式名称が「グレート・ブリテン及び北アイルランド連合王国」という長ったらしい名前であることを知って驚いたことがある。それまでイギリスと呼んでいた国が、かつてはスコットランド、イングランド、ウェールズ、そしてアイルランド等に分かれており、それぞれが独立した王権を営んでいたことさえ知らなかったからであった。そして、統合された今でも、英国内は決して一枚岩とはいえない難いというの

も驚きだった。それを知らなければ、シェークスピアもわからないし、IRAの活動の意味もわからないというのである。さらに、現代ともなると、ロマン派などをやっている自分には複雑過ぎて訳がわからないと思っていた。けれども、本書はそんな複雑なイギリスを、デヴィ・ボーイからパンクに至るスタイルを通して自己主張の歴史としての若者文化、「強い」イギリスを標榜して不評を買ったサッチャー首相の価値観、揺れるスコットランドの政治状況、最近元氣なイギリスの映像文化、独特の二重構造をもつ宗教文化等、多様な視点で切り取ることで、あたかもホログラフィーのように、現代イギリスの全体像を浮かび上がらせるのに成功している。異文化理解の方法論のひとつの見本ともいえる鮮やかな一書だといえるだろう。

遠藤 徹

(大学言語文化教育研究センター専任講師)



八千代出版
3,000円

租税法要論

浅沼潤三郎 (大学法学部教授) 著

租税という手段は古今東西を問わず政治の主体と人民を強力に繋ぐものであり、現代社会にあつては国家・地方公共団体の財政の存立と人民の多様な経済活動や各種資産の保有とは広範・複雑に絡みあい、それへの依存のための太い多様な絆となつてゐるのが税法である。

国税・地方税を通じて多岐にわたる各種税法を統一的に述べることの困難さは門外の者にも容易にうかがえるが、この本では序論、税法の体系、税法の基本構造、税法の基本原則、税法の解釈と運用、租税実体法―総論、租税実体法―各論、納税義務の成立・承継および消滅、租税手続法、租税救済法、租税処

罰法と税法全般について読者に鳥瞰的に認識させることに成功している。

著者は特に「税法の基本構造」

について力を注ぎ、国家の政治・財政政策の基礎ともなるべき税法上の基本原則について税率論から課税最低限あるいは基礎控除などについてグラフなどを使った周到な配慮によつてその立法の根底から現存の税法の構造を理解させるように試み、税法解釈への意欲増進につないでいる。

本書は書名の通り税法全般について要を尽くすだけでなく、理論的に検討を求められる諸点について自説を展開するなど、研究者にとつても益することの多い新鮮な好著である。

西尾 昭 (大学名誉教授)



中央経済社
3,600円

企業政策論と総合政策科学

太田進一 (大学総合政策科学研究科教授) 編著

「総合政策科学」を書名に頂く本は、生協和書検索サービスで調べる限り、二冊しかない。一冊は、大谷實他編著『総合政策科学入門』であり、もう一冊が、この『企業政策論と総合政策科学』である。題名から見ても、より深く総合政策科学を論じようとする、総合政策科学・企業政策担当者意气軒昂を示すものである。今日、総合的政策の必要性について疑う者はいない。従来の「足して二で割る落とし所」政策では、「全員不満足」問題先送り」であり、奈落の底に落ちるだけである。しかし、必要性とそれに対処し得る方法論の間には、大きなギャップがある。現

状は、総合的問題解決の方法論は見えず、各論を集積している段階である。その意味では、この本でも、共著者がそれぞれ各章を分担しているのは、時宜を得た編集方針である。

総合政策科学研究科院生の中にも、各論の集合とも取れるカリキュラムを前に、「カルチャーセンターではないか？」と疑問があるようである。しかし、総合政策科学を志す者は、複数の境界領域について水準以上の知識を習得するしかない。それが「茨の道」であるとしても、である。実際、心ある院生は、程なく、「カルチャーセンター」的要素を積極的に捉え、それを入り口として、境界領域に深く入っていく。この本は、企業政策の立場からその様な入門書として活用できる。読者は、「茨の道」に進むべきである。そして、彼方にある「美しい城」をぜひとも見出して頂きたい。

金田重郎 (大学総合政策科学研究科教授)



東洋経済新報社
3,000円

為替レートと対外不均衡の経済学

藤原秀夫 (天学商学部教授) 著

七〇年代初め、先進国は固定為替相場制から変動為替相場制への移行を歓迎した。というのも、変動為替相場が自動調節機能を果たす役割として、対外不均衡の桎梏から解放放つ魔法の杖であると期待されたからである。ところが、実際には人々の期待を裏切る結果になってしまった。特に、八〇年代になって、日米経常収支のインバランスが両国間の経済摩擦を引き起こしたことは記憶に新しい。このような潮流の中で、為替レート決定の理論化と対外不均衡是正の処方箋が提示されてきた。

本書の特色は、三つの代表的な為替レート決定理論である国

際収支均衡モデル、マネタリー・モデル、資産モデルの部分均衡モデルを一般均衡モデルの枠組みの中に統一化し、各々の相互関係を明確にした点である。さらに、分析を時間の要素も考慮した動学モデルへと拡張した点にも特色がある。理論の統一化という作業を終えた後、市場開放政策、金融財政政策のマクロ的有効性と限界、中央銀行の独立性問題、ドルの国際的役割、途上国の債務危機など現実の問題を組上に載せて吟味している。ちなみに、昨年のノーベル経済学賞は国際経済の分野で著しい貢献をなしたR・マンデル教授に与えられた。受賞対象の一つに有名なマンデル・フレミング・モデルがあり、これは為替市場とマクロ経済政策の効果について論じている。この受賞意義を知るうえで、是非本書を繙かれることを薦めたい。

西村 理 (大学経済学部教授)

社会福祉の思想と人間観

ミネルヴァ書房 三、五〇〇円
嶋田啓一郎 (天学名誉教授) 監修
小山隆 (天学文学部助教授) ほか執筆

社会福祉実践には何らかの価値が投影している。価値を排除した無機質の社会福祉実践などおよそ考えられない。ところがこれまでの社会福祉研究にあつては、「科学の客観化認識」(嶋田啓一郎)に立つ構造・機能論が支配的であり、価値論の研究蓄積は乏しかった。その意味で本書は社会福祉を支える価値や思想、人間観を探索し、体系的に把握しようとする貴重な学問的試みである。本書は四部構成である。

第一部「社会福祉の価値と思想」では、嶋田は「福祉倫理の本質課題」として「主体性の黄昏」を克服する「人格価値」の再発見を強調する。秋山智久は幸福論の検討の上、その社会福祉の接近の意義を考察し、社会

福祉哲学の構想を示唆する。高田真治は「共生」関係の諸相と共生概念を整理し、「共生・共同の理念」を重視する。木原活信は「キリスト教と世俗化」の関連を検証する。第二部「社会福祉の価値研究」は、平塚良子「ソーシャルワークの価値の科学化」、加藤博史「ソーシャルワークの価値の構造」、横山稷「社会福祉の価値と人間観の変遷」がそれぞれ細密に追求される。第三部「ソーシャルワーク実践の価値観」は、久保美紀「エンパワメント」、小山隆「自己決定」、岩間伸之「媒介機能」のいずれも丹念な分析を通して明確化される。第四部「社会福祉分野の人間観」は、富永雅和「知的障害者」、内藤雅子「介護福祉」、笠原幸子「介護福祉」を対象に展開する。

嶋田研究会に集う気鋭研究者たちの力作を集成した著作であり、学界の注目を集めよう。

井岡 勉 (大学文学部教授)



オーム社出版局
1,400円

テクノライフ選書

進化する人工物

三木光範（大学工学部教授）著

二十一世紀は人間と環境のあり方が問われている。人間の生活を豊かにする目的で開発されるすべての人工物が環境破壊につながる可能性をもっている。

本書で述べられているように、今後の人工物は表面的な便利さや機能の豊富さで評価されるのではなく、本当の意味で環境や人に優しい「知的な人工物」でなければならない。LSI技術、コンピュータ技術、通信技術の目覚ましい進歩は、人工物をこれまでの高機能化や高性能化とは異なる知的化の方向へ導いていくとしている。

本書では人工物の発展を環境に適合し勝っていく生物の

進化になぞらえ、生物が環境に適合するため知的な方向へと進化してきたように人工物もまたそれらの利用される環境に適合するべく知的化の方向へ進化していくと述べられている。問題とは何かにはじまり、筆者の考える知的な人工物とは、知的進化の過程、知的人工物の構造、知的化の戦略、知的人工物の問題点と克服まで一貫したシナリオで多くの具体例を入れ興味深く書かれている。どのような人工物が適者として勝ち残るのか、またそのような人工物はいかなる戦略で開発されるべきかなど、研究や技術開発に携わっておられる専門家の方、技術分野に進もうと夢を膨らませておられる学生の諸君、また技術と直接関係のない読者の方にとっても、これからの人工物のあるべき姿について「なるほど、なるほど」と納得しながら興味深く読んで頂ける一冊である。

河岡 司（大学工学部教授）



かもがわ出版
2,000円

京の庶民史

―伝統と技に学ぶ―

同志社大学 西村卓（大学経済学部教授）
ゼミナール編

私は学生に「卒業論文」については、ぜひ自分の調べたいことを自分の目と耳と足を使って書くようにと勧めている。しかしである。最近の学生は身体を動かすことは少なく、チョコチョコと文献をまとめたパッチワークのような卒論が多い。それどころか、なかなかテーマが決まらない学生もいる。四年次生の冬に卒論が提出され期待をもつて読むと、玉石混交で、この程度のものしか書けないのかと、指導力不足を反省する。

こうした指導上の悩みに回答を与えてくれる本が、経済学部の西村卓ゼミでは、小グル

ープ毎にテーマをきめ、フィールドワークをおこない、それを卒論に結実させる。またその経験や資料は、先輩から後輩へと受け継がれていく。こうした営みのなかから選りすぐられた論文を集め、編集されたのが本書である。本書では、白川女・保津川下り・北山杉・錦市場・京都職人町がテーマとされ、これらにかかわる人々への、その父母や祖父母のライフヒストリーにまで逆上った調査により、京都に住む市井の人々の生活と労働が見事に描かれている。

また、各章の初めには教授の厳しくも温かい解説がついており、現在の大学や学生・教員をとりまく状況が浮き彫りになっている。教育論・大学論としても興味深い。まさに西村先生の十数年におよぶ学生指導の結晶であり、ゼミナール学生諸君の記念碑である。

鰺坂 学（大学文学部教授）



北大路書房
7,000円

人間の情報処理における聴覚言語イメージの果たす役割

井上智義 (天文学部教授) 著

著者は、これまで認知心理学及び言語心理学の立場から、「聴覚言語イメージ」というテーマに関して、一貫して研究を進めてこられた。本書は、その研究成果をまとめた力作である。

聴覚言語イメージとは、ことばの音韻的表象をさしており、著者によれば、本を黙読しているときに、実際には聞こえていない音で「頭の中で流れている音」として、我々が実感するものである。この聴覚言語イメージに関する研究は、従来あまり行われておらず、その特性については心理学的にはほとんど明確になつていなかった。本書で

は、聴覚言語イメージが人間の認知過程においてどのような役割を果たすのかが、綿密な実験にもとづく実証的検討により、見事に明らかにされている。

本書の第I部では、聴覚言語イメージの定義とともに、人間の情報処理過程における聴覚言語イメージの心理的リアリティとそれはたらしきについて検討がなされている。第II部では、発達の観点から、子どもにおける聴覚言語イメージの使用とその機能について、第III部では、聴覚言語イメージをもつことが難しい、ろう者や難聴児の言語情報処理の特性や聴覚言語イメージを補完する機能について、検討がなされている。そして第IV部では、本書のまとめと総合考察がなされている。

本書で得られた研究成果は、心理学の分野にとどまらず、教育の分野においても重要な意義をもつものといえるだろう。

井上 毅 (滋賀大学教授)



昭和堂
3,800円

言語学は自然科学か

中井 悟 (天文学部教授) 著

生成文法と呼ばれる新しい言語学は、一九五〇年代半ばに誕生した時から自然科学的な言語研究であると主張されてきた。

しかしながら、生成文法が他の自然科学の分野と同じ方法で言語を研究しているのかどうかをめぐってさまざまな議論があり、今もまだはつきりとした結論は出ていない。本書は、まさにこの問題に正面から取り組んでいる。著者は、第一部で文法は心的実在を持つか、言語研究に自然科学の方法論が用いられるか、生成文法と自然科学の理論の発展の仕方に平行性があるかという問題をポパーやヘンベルなどの科学哲学者の科学観を援用しながら様々な文献から

の引用に基づいて丁寧に論じている。科学哲学の観点から生成文法の具体的な分析を評価する試みはあまり例がなく、本書の論考はその意味でも貴重である。第二部では、生成文法の方法論に対する批判の誤りを指摘し、生成文法を擁護する議論を展開している。本書は、平易なことばで分かりやすく書かれているが、専門的な議論を含む箇所も多く、生成文法のある程度の知識や生成文法の哲学的側面への興味がないと、本書の議論の真価を理解するのは必ずしも容易ではないかもしれない。しかしながら、本書は、長年に渡る著者の研究の重みと深さが感じられる好著であり、読者は、章を追うごとにこの問題についての思索が深まり、著者に導かれていつの間にか著者の思索の跡を追っているような印象を受ける不思議な本である。

上田 雅信 (北海道大学助教授)



京都修学社
4,000円

イギリス・ロマン派詩 人たちの素顔

ヘンリー・クラブ・ロビンソン 著
杉野 徹 女子大学文学部教授 訳

本書は、ロビンソンという文学好きの弁護士が、イギリス・ロマン派の巨星たち——ワーズワスやコールリッジやラムなど——と十年にもわたってつき合った思い出や日記などを集めたものである。英文学とリわけロマン派の文学に興味をもっている人には、こたえられないほどおもしろいエピソードが次々目に入ってくる。

「天使たちに命令」されて書き始めると、部屋中に「ことばが飛びかっているのが見えて」きたという天才ブレイクの話や、友人を裏切ったり、絶交された

り、あげくの果ては奥さんに離婚をいわれたたりした、評論家ハズリットの話なども、大変興味深い。しかし圧巻は、ワーズワスとコールリッジのけんかである。困惑したロビンソンが二人の間を行き来して誤解を解き、ついに二人が再び仲よくなる——この過程は感動的である。このような彼らの実生活から、彼らの文学の一面が、さらによくわかるようになる。

訳者杉野徹氏は、ケンブリッジ大学で学んだロマン派の研究家であるが、シェリーやヒューズなどの翻訳も多数手がけ、翻訳につける注釈の綿密さには定評がある。本書の行きとどいた人名の注釈やインデックスからは、数多くのその他の十九世紀人たちの姿や人間関係も浮かび上がる。大変啓発され、これは本来、人間の好きな人でないといけない仕事だと感心した。

児玉実英（女子大学文学部特任教授）



松柏社
3,500円

アメリカの嘆き—米文学史の中のピューリタニズム—

林以知郎（大学文学部教授）ほか著

本書は、長年日本におけるピューリタニズム研究において中心的な役割を果たされ、一九五七年から七六年まで本学文学部において教育研究活動に携わられた秋山健先生監修の書である。本学と上智大学で先生の指導を受けたアメリカ文学研究者が中心となり、ピューリタニズムとアメリカ文学の関わりを、植民地時代から現在に至るまでの長い時系列の中で捉えていこうとする興味深い企画構成である。

植民地建設の思想基盤であったピューリタニズムは、時代の推移と共に世俗化され、国家発展のイデオロギーとして、また

イデオリーを守るための排他的な共同体意識の装置として、様々な文化言説に容れられてきた。各論考はピューリタニズムを定點として、文学テキストを構築しているアメリカの文化言説を再検証し、読み解いていくという意欲的なものである。

林教授の「戦略としての『ピューリタニズム』」はフェニモア・クーパーを取り上げている。産業化への移行が進む一八二〇年代において、支配的権威を確保しようとする新興勢力が利用した「ピューリタンのロマンス化」に対し、クーパーはピューリタン・フォークロアをパロディ化するという語りの戦略によって、批判的テキストを作品の中で具現している。鮮やかに読み解いている。最近のアメリカ文化研究の論考を敷衍しながら、クーパーのピューリタン文化に対する批判的な眼差しを検証する斬新な論考である。

石塚則子（大学文学部助教授）